教育は百年の計であり千曲市の最優先課題である

なぜ 114 年の歴史を持つ屋代南高校だけが閉校になったのか？
県教委の三次計画案の検証と我々の主張

なぜ、「新校は更級農高に集約する」が白紙になったのか？

活動の経緯

はじめに
この町に起きた象徴的な二つの事件
第一部　屋代南高校だけが閉校になった経緯と原因
1.　県教委の三次案を検証する
2.　三次計画案の問題点と我々の主張
3.「屋代南高校を発展させる会」による県教委への要望の内容

第二部　第二部　県教委の三次案計画案「新校のキャンパスは一つ」を白紙に戻すことに成功―――運動の経緯
1.　学びの場を失うことは千曲市の創生の芽を摘むことになる
2.　高校の編成問題は市町村間の争奪戦である
3.　屋代高校 OB を中心に「千曲市の学校を守る会」を設立、その後「千曲市の教育の機会均等を守る会」に継承
4.　具体的な活動と成果
県教委への感謝の言葉
活動に参加していただいた方々と団体
おわりに

はじめに

私は屋代南高校の存続のために多部制単位制の方針から情報技術学科を中心にした高校づくりの提案者として、令和３年「屋代南高校を発展させる会」の顧問にさせていただきました。

一昨年７月の県教委の計画案では、驚くことに千曲市だけが編成の犠牲になり、南高はおろか学ぶ場さえもなくなる内容でした。

大変なショックとともに顧問として責任を痛感しました。何としても千曲市の将来のために学校を取り戻すことを決意し、屋代高校 OB の仲間たちに呼びかけ、「千曲市の学校を守る会」（現在の「教育の機会均等を求める千曲市民の会」）を設立しました。幸い各界に有力な人材がおりましたので、県、県教委へ直接働きかけ、約１年にわたる活動の結果、いったんは失った学校を再び振出しまで戻すことができました。

勿論私たちだけでなく、各界の方々のご努力もあってのことですが、情報がありませんので僭越ですが、我々の運動を中心に記録しました。

以下の取り組みにつきましては、独断ではなく常に市長並びに市議会へ事前及び事後に報告し、時には同行等をお願いして、官民一体の努力をしてまいりました。

教育＝人材の育成は市政や市議会に任せるだけでなく、私たち市民の問題です。何としても高校教育の過疎地である千曲市に学ぶ場を誘致するために、官民一体になって取り組む起爆剤になれば幸いです。

この町に起きた象徴的な二つの事件

ここにあげた二つの事例は全く同じシチュエーションで片や警察の廃止、一方は高校の編成であった。いずれも人口にかかわる合理化策であり、国の方針であり、県の事業である。しかし残念ながら成否を分けた。

１００年前に起きた警廃事件

1926 年 7 月今から約 100 年前、長野県知事から人口動態の変化による警察署の編成によって、屋代、中野、佐久の各警察が廃止されることになった。三町統一の反対運動が組織され住民が立ち上がった。当時の町長が私の祖父の新村虎次郎であった。7 月 28 日三町合計 1100 人の住民が反対運動に参加したが、暴徒化し知事公舎、議事堂を襲い 866 人の検挙者を出した。祖父も首謀者として検挙された。多大な犠牲を払ったが、三署は復活して今の千曲警察署がある。屋代南高の閉校問題と動機は全く同じであり、人口問題による編成であり、国の方針による県の事業であつた。現在より国家権力の強い時代に屋代町の町民は身体を張って警察を守ったのである。検挙者 866 人、送検 638 人、うち 143 人が起訴された。中村勝美「われら警察を奪回する」の著書がある。

屋代警察署は屋代町の住民の力によって守ったおかげで千曲警察署がある

１14 年の歴史を持つ屋代南高等学校の閉校が決まった

2021 年 9 月千曲市は県教委の高校編成に忖度して１１４年の歴史を持つまちの文化遺産である屋代南高等学校の閉校を容認して、見返りに新校の分校を要望した。2022 年 7 月県教委の計画案は「南高は閉校する。見返りの新校の分校は置かない」と、最悪の回答であった。自分の首を差し出したにもかかわらず、関係学区内で唯一編成の犠牲になり、千曲市は学ぶ場を失ったのである。もともと高等教育の過疎地であったにもかかわらず、6 万人に 1 校という教育の機会均等を著しく欠いたものであった。

幸い新校の校地は白紙の状態に戻ったので、官民一体になって学びの場を確保しなければならない

学校は、警察とともに千曲市にとって欠くことのできない資産です。

官民一体になって、なんとしても取り戻さなければなりません。

第一部　屋代南高校だけが閉校になった経緯と我々の主張

1.　県教委の三次計画案を検証する

(1) 再編・整備計画とは(原文のまま)

高校改革の経緯　2017 年 3 月
「新たな社会を創造する力」を育む教育の推進と高校づくり

高校教育が目指すもの

激変する学びの推進　(新たな学びの推進　学びの質を充実)

進行する少子社会への対応　(新たな高校づくり　学びの基盤を整備)

次世代を担う子どもたちのための高校改革

○ すべての県立高校で進める！

○ **少子化による単なる数合わせの再編・整備ではない！**

○ 新たな社会を創造する力を育むための改革！

以上のミッション、ビジョンのもとに三次案は作成された。

(2) 発表された県教委の三次計画案

① 長野千曲総合技術新校を設立する
更級農業高校に屋代南高校のライフデイン科と松代高校商業科を統合し、新たに状技術学科を加えた長野千曲総合技術高校にする

② 松代高校の普通科は残すが、屋代南高校の普通科は廃校にする

③ 旧第 4 通学区では坂城高校、長野南高校、篠ノ井高校、松代高校は存続する
屋代南高校だけが廃校になり、千曲市は屋代高校 1 校になる

(3) 屋代南高校が廃校になる理由

千曲市には、規模の大きさを生かした屋代高校が存立している

以上が県教委の説明である。

2. 我々の主張

(1) 屋代南高校は閉校が決定したにもかかわらず抜群の人気校(入試倍率)である

関係高校別入試倍率　令和５年

	前期選抜				後期選抜		
	学科	募集数	志願数	倍率	募集数	志願数	倍率
屋代南	普通	24	53	2.20	56	52	0.93
	ライフ	20	35	1.75	20	19	0.95
更級農	農業	80	101	1.26	80	60	0.75
松代	普通	32	32	1.0	48	45	0.94
	商業	20	30	1.50	20	13	0.55
坂城	普通	32	36	1.12	48	38	0.79

特筆すべきことは、南高は閉校が決定しているにもかかわらず、長野県下で岡谷東 2.5 倍、上田千曲 2.29 倍、に次ぐ三番目にランクされる倍率であった。
このことは、交通の至便さと近隣に学ぶ場がないことを端的に表しており、無くてはならない学校であり、ユニークなライフデザイン科を持つ人気校であることがわかる。生き残った他校に比較して屋代南高校は存続させる条件がもっとも整っており、皮肉なことに計画案とは真逆な結果になった。

(2) 屋代高校は全県規模の学校であり、千曲市の学校ではない

県教委は千曲市には規模の大きさを生かした高校が存立しているので南高を閉校してもカバーできると説明している。

① 千曲市の中学生の生徒数 （令和４年５月現在）
　１年生 467 人　２年生 506 人　３年生 525 人　合計 1498 人

② 千曲市から屋代高校へ入学した生徒数
　屋代高校の在校生は 835 人であるが、千曲市出身の生徒数は 151 人なのでその割合は 18％に過ぎない
　（屋代中学 59　埴生 23　更埴西 24　戸倉上山田 23　屋代高校付属 22　合計 151 人）

③ 今年度、千曲市の中学卒業生は 525 人であり、屋代高校への入学者は 44 人なので１２人に一人の割合である。

以上のデータが示すとおり、屋代高校は北信地域の代表校であり、千曲市の高校ではない。したがって、県教委の「千曲市には規模の大きさを活かした高校が存立している」という理由は成立しない。事実上、千曲市にはまちの学校がなくなることになる。

(3) 千曲市は今でも劣悪な教育環境にある

① 市町村別、人口に占める高校数(公立、私立、通信の合計)の比較
令和４年４月

自治体名	人口	高校数	１校当たりの人数（人/校）
長野市	368133	24	15338
上田市	152463	10	15246
須坂市	49040	3	16347
坂城町	13587	1	13587
千曲市	58281	1	58281

人口割でみると、他の市町村は１校 15,000 人前後であるが、計画案だと千曲市は桁違いの 58300 人に１校になってしまう。その１校も千曲市からは年間５０人しか入れない屋代高校である。
千曲市から高校に進学する毎年 500 人近い子供たちは、他の自治体にしか入る高校がなくなり、教育の機会均等の点からみて三次案は納得できない。

② 長野県で学べる高校の数　（長野県統計室 22 年）
公立高校 82 校　私立高校 17 校　通信高校 12 校　合計 111 校あるにもかかわらず、千曲市には１校だけになってしまう。編成とは人口の増減が大きなファクターになるが、もともと高校教育の空白地帯である千曲市から一校減らしたことは逆行しているともいえる。

(4) 屋代南高校の廃校は学びの空白地帯を作る

① 三次計画案は「**鉄道の沿線ばかりに偏って配置されないように、通学区内の地域バランスを考慮した**」とあるが、全く理不尽であり理解できない。解説では屋代南高校が鉄道の沿線に偏った高校だとあるが、長野市と上田市は４５キロあり、その真ん中に位置する千曲市は、偏るどころか長野市と上田市を結ぶ中間点にある。交通至便の最も通学に便利な場所なので、もし屋代南高校を廃校にすれば、その間の近隣市町村の約 10 万人近くに影響することになる。まさに「学びの空白地帯」ができる。これは市町村ではなく長野県自体の問題であり、その影響は計り知れない。

② その証左として、先にも示したように南高が閉校になることが明確になった本年の普通科の志望率はなんと**県下で 3 番目**に高かったことからも明白である。

③ 松代高校普通科を残す理由として、松代地区の伝統・文化・地域資源を生かすとあるが、千曲市は国の文化遺産である月の都であり、4 世紀時代の東日本一の前方後円墳があり、日本三大車窓の一つや棚田 100 選の第 1 号を持ち、本年８月２６日の日経の日曜版では日本に残したい原風景として１０位にランクされた。松代の歴史より以前の 4 世紀半ばの更科の里までさかのぼり、古今和歌集から芭蕉まで文化遺産も国家レベルのまちなので、歴史的遺産を選別の対象にするとすれば屋代南高校を廃校にする理由にはならない。千曲市は古い歴史と交通の要衝、産業の集積地と三つの強みを持つ町なので最も存続の条件がそろっている。

(5) 千曲市は総合技術教育に最適な環境にある

① 交通の要衝の地である

現在は、長野自動車道と上信越自動車道が合流する更埴ジャンクション。2 カ所のインターチェンジ。更埴インターチェンジ、姨捨スマートインターがあって、高速交通網の重要な地にある。

屋代南高校はしなの鉄道 屋代駅から徒歩 5-6 分の至便な位置にあり、県下一の最寄り駅に位置する。

② 産業の集積地である

千曲市 2021 年において、生産額ベースで全国平均と比較したときに、強みのある（集積している）産業は、「電子部品・デバイス」、「汎用・生産用・業務用機械」、「情報・通信機器」、「電気機械」、「食料品」、「観光・宿泊・飲食サービス業」。特に観光面においては、湯量豊富な戸倉上山田温泉、一目十万本のあんずの里、姨捨の棚田といった観光資源を有しており、年間約 186 万人の交流人口がある。

【就業人口】

第 1 次産業： 441 人（1.9%）
第 2 次産業：8,690 人（37.2%）
第 3 次産業：14,205 人（60.9%）
合計　　23,336 人

【事業所数・従業員数】

総数　：2,692 事業所・23,336 人

製造業：　370　事業所・　7,370　人

合計　　3,062 事業所

【製造品出荷額】

合計　2,025 億円

③　現在、続々と大企業が進出中である

最近では、中国、ロシアの脅威から国内回帰が始まり、交通の要衝である大企業の進出も目覚ましいものがある。もともとの地場産業としてフレックスジャパン、長野電子、エムケー精工、丸善食品、メディカルケア等あるが、現在進出中企業は建設レンタル最大手のアクティオが国内最大規模の工場建設、ダイワハウス工業の物流団地の設置、レンタル業の三菱キャピタル、半導体大手の新光電気工業の生産拠点構築、世界のアマゾンの物流 DS などがある。また、35ha ある屋代地区では大手のデベロッパーが開発を手掛け、工業団地、商業団地、住宅地などの開発を開始した。これら全ての企業が AI や IT は必須のアイテムであり、その他にも多様な技術を持つ人材の交流は欠かせないので、千曲市にとって総合技術を学ぶ学科は絶対に必要である。

④ 新高等学校の指導要綱は地域振興の核として高等学校を位置付けている

国では新高等学校の指導要綱には「地域を分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するために産業界などとの協働によるコンソーシアムを構築し、地域振興の核として高等学校の機能強化を図る」とある。

千曲市はこの要綱の目的に適合するまちであるにもかかわらず、60,000 人の産業都市に高等学校が 2 校しかなく、専門学校も大学もない。そのうちの 1 校が再編の対象になって閉校になったことは危機的状況にある。

(6) 学校も来ない千曲市にとって長野千曲総合技術新校（仮称）は、納得ができない

結局、廃校にする見返りにライフデザイン科を更級農業高校に吸収して千曲の名前だけを入れて長野千曲総合技術新校（仮称）とした。企業の合併と違い、名前だけいただいても学ぶ場がなければ全く意味がない。編成しやすいまちの高校を減らしても、真の学びの改革にならない。千曲市は一校二校の問題ではなく、

長野県の教育問題として堂々と最適な教育環境にあることを主張すべきである。以上の通り、この三次計画案にある屋代南高校を廃校にする妥当性について検証してきたが、県教委の計画案はビジョンとの整合性が取れないことを指摘したい。

4.「屋代南高校を発展させる会」

(1)　組織の構成

権利能力のない任意団体であるが、市長はじめ千曲市を代表するメンバーの集団であるから、千曲市を代表する組織である。
市長、教育長、県会議員、市議会前正副議長、市会議員、同窓会、商工会、商工会議所、区長会、産業界代表、市民団体、提案者の児島他
編成問題に対処するため市長が教育委員会に中村氏を教育指導幹として招いた。

(2) 目的

屋代南高校を存続させ、発展させることを目的とする。

(3)　県教委への要望書の主旨

①　7 月 28 日、採決された内容の主旨
更級農高と南高は独立してそれぞれの専門学科を持つ技術の学校に改革して生き残る。また夜間の定時制を含めた多部制単位制課程を併設することを提案している。要望書では屋代南高校の存続を要望した内容であり、採択された。

②　9月１５日　県教委への要望
執行部が県教委に要望した内容は大きく踏み込んでおり、南高の閉校を容認する代わりに分校として残して欲しい旨のものであった。当日、同窓会長が口頭で「名前が変わってもよい」と発言している。
このことは新校の分校を前提に南高の閉校を容認したのである。会の運営上問題があるが、後日事後承認の形で成立させた。

その結果、県教委の計画案は屋代南高校だけが閉校になり、要望した分校は受け入れられなかった。

第二部　県教委の三次案計画案「新校のキャンパスは一つ」を白紙に戻すことができた

1. 学びの場を失うことは千曲市の創生の芽を摘むことになる

再三ふれたとおり、千曲市は交通の要衝の地であるから過去には新幹線駅の誘致から始まりイオンモールや新潟薬科大学など幾多の企業や学校などの進出する話があった。しかし、ビジョンや戦略を持たない千曲市はことごとに逃してきた。

この度の大企業の進出も千曲市の努力ではなく、開発が遅れた千曲市しか残っていなかったに過ぎない。

理由はともあれ、このチャンスを生かして、最も時代の要請にマッチしたデジタルの人材を育成する教育機関を整備しなければならない。そのために高校編成を「禍を転じて福となす」とし、情報技術教育の場を確保する絶好の機会ととらえて、真剣に取り組まなければならない。しかし、「発展させる会」はほとんど活動を停止した状態だったので、**このままでは学校が無くなることは明白であった。**なんとしても学びの場を取り戻差なければならない。そのためには我々市民が立ち上がらなければならない状況になった。

2. 高校の編成問題は市町村間の争奪戦である

学校を失うか存続できるかは、言うまでもなく市町村間の最大の問題であり、ある種の争奪戦でもある。坂城町はいち早く町長と教育委員会で DX を立ち上げ国の指定校にして生き延びた。松代高校は小川市長が否定する歴史文化のまちを前面に出して普通科の存続に成功した。更農は県職の有力な OB が結集して、農場を持っていることを切り札にして、時代が求める情報技術学科の新設と南高からライフデザイン科を奪い総合技術高校に変身させようとした。一方我が千曲市は、安易に県教委に忖度して戦わずして首を差し出してしまった。

本来であれば最後まで南高を死守すべき同窓会が母校の閉校を容認してしまったことは残念であった。

3. 具体的な活動

(1)　屋代高校 OB の仲間で「千曲市の学校を守る会」を設立

私の高校時代の昭和 28 年当時は、人口 5000 人の屋代町に屋代東高校、屋代南高校があった。われわれにとって屋代南校は姉妹校のような感覚で親近感があった。その高校が存亡の機にあるので、私は新制高校８回生を中心に呼びかけて屋代高校 OB の「千曲市の学校を守る会」(現在の「教育の機会均等を求める千曲市民の会」)を設立した。以下１年の活動の記録である。

①　令和３年２月、前教育長の赤地先生の紹介で南高を発展させる会の司令塔の役割を果たしていた中村前教育指導幹に会うことができた。今までの方針である多部制・単位制の方針を変えて、情報技術の学科を中心にした総合技術学科を置いた南高の改革案を提案した。５月の総会で中村氏は我々の提案通り、存続のための企画案を提出し、会は方針転換を了承した。あくまでも目的は南高の存続であったことは言うまでもない。

②　令和４年２月　財界の支援を受けるために長坂氏(屋代高校９回生長野無線元専務)の紹介で、長野県経営者協議会専務理事水本氏に陳情する。

(2)　県教委に５回の面談を含め通算８回の意見交換を重ねる

①　令和４年６月　このままでは南高は廃校になり、新しいキャンパスはできないのではないかと危機感を持ったので、我々は経済界に呼びかけ県教委に要望書を提出することにした。当時文教副委員長だった竹内県議のご紹介をいただき、商工会議所会頭武井氏、商工会会長高村氏と商工会議所アドバイザーの私以上三名が訪問し要望書を提出した。(県教委への要望書)
以後、この面談を機に県教委とは自由に意見交換ができる関係になることができた。

②　令和４年７月　県教委の計画案が発表される。屋代南校は閉校になり、新校は更級農高に集約されることが判明した。但し書きに「本案は計画案であるが、変更の意思はない」つまり、決定案であることを示唆していた。

③　令和４年８月　屋代高校 OB の会を発展的に解消し一般市民団体「教育の機会均等を求める千曲市民の会」代表宇田川氏に引き継ぐ

④　県教委主宰の産業界の代表として私は千曲市から参加する。
千曲市に情報技術の人材を育成する教育は長野県として必要であり、千曲市から学校を無くすことは教育の空白地帯を作るので長野県の観点から再考を求めた。

⑤　県教委は計画案としているが、ほぼ決定事項と判断したので、このままいくと千曲市には新校も来ないことが現実になった。県教委に直接会見をして我々の主張を聞いてもらう運動を進めることにした。

⑥　以後、県教委とは単独あるいは市民団等を加えて懇談の機会を持った。県教委は誠意を持って対応し、毎回宮澤推進室長以下幹部 5 名から 7 名が参加し、時間も毎回 1 時間から 1 時間半を費やした。
しかし、真剣な会談を積み重ねたにもかかわらず、県教委の意思は固く最終決定の 1 か月前まで変えることはなかった。県教委が主張する主要項目は以下の通りである。

○　屋代南高校は閉校する。
○　閉校の理由の一つは、屋代南高校にいく千曲市の子供たちは少ないので影響がない。屋代高校があるからよいではないか。
○　仮称長野千曲総合技術新校をつくる。
○　科目は屋代南高校のライフデザイン科と松代の商業科と更級農高を集約して、情報技術学科を新たに加える。
○　ただし、キャンパスは一校であって、分校は作らない。
○　一校にする理由は、DX 時代農業も商業もすべて情報技術に直結しているので集約したほうが良いからであると、回答があった。
○　校地は農地のある更級農高に内定している。
○　千曲市が本気で誘致したいなら 3 万坪の農地を手当てすることが条件

当然、全項目に対して反論したが、県教委は終始一貫した主張であった。
以上の件については毎回小川市長, 小玉市議会議長へ報告し、時には行動をともにしていただくこともお願いしたが、実現はできなかった。

(3)「教育は千曲市の百年の計」であるので最後の努力をする

以上の通り、県教委の壁は厚く一時はあきらめかけたが、千曲市にとって高校が無くなることは百年の禍根を残すことになるので、我々の意向が何らかの形で県に通じる努力をすることで決意を新たにした。詳細は申し上げられないが、今までお会いした有識者の方や我々が主張してきた資料や提案書をまとめて発信するなど懸命な活動をした。その結果、

① 12 月教育委員会で計画案が承認されることになっていたが、１２月２３日に 1 か月の延期が発表された。

② １月 16 日に教育委員会で計画案が正式に了承されたが、その内容は一つのキャンパスに限定しないであった。

以上の通り、市民団体「教育の機会均等を求める千曲市民の会」が会談した 11 月 22 日までは千曲市には分校を置かない、誘致したいなら 3 万坪の農地を提供すればエントリーできるなどの条件は揺るがなかった。ところがその 1 か月半後に最大のネックであるキャンパスは一つが白紙になったのである。首の皮が一枚つながった起死回生の朗報であった。

(4) 直近の県教委との懇談でわかった情報

２０２３年4月２６日

出席者　矢島隆生フレックスジャパン社長　児島保彦

高校再編推進室　宮澤推進室長　堀田企画幹　柳澤主幹指導主事　山崎主任

校地決定までのプロセスを明確にする　　()内は回答である

1 つのキャンパス案は破棄したのか

① 計画案と決定された計画とはどこが違うのか
　校地は懇話会で決める

② 直前まで、二つのキャンパスは認めない方針であったが変えたのか
　あらゆる選択肢を排除しない

2. 懇話会とは

① 県教委と懇話会の位置づけについて
　県教委の下部組織である

② 人選はどこがするのか
　基本的に県教委 年内に決定する

3. 最終的の校地の決定権はどこが持つのか
　懇話会の意見を聞いたうえで県教委が決める

県教委の皆様へ感謝の言葉

県教委へは単独ないしは諸団体を共にして５回の面談を御願いしましたが、お忙しい最中、毎回宮澤推進室長以下５名から７名の幹部の方が出席いただきました。率直な意見交換の最中に失礼な言動もあったことをお詫び申し上げます。最終的にはキャンパスは一つが白紙に戻ることができましたことを心から御礼申し上げます。

この活動に参加していただいた方々と団体(順不同)

商工会議所武井会頭、商工会高野会長、長野県経営者協議会、屋代高校 OB「千曲市の学校を守る会、赤地元教育長、矢島隆夫フレックスジャパン社長、竹内県議、川嶋市議、聖澤市議、中村教育指導幹そして我々の「千曲市の教育の機会均等を守る会」の皆様です。ほかに多くの方のご支援をいただきました。あらためて感謝申し上げます。

おわりに

我々は１年半にわたる取り組みの結果、なんとか振出しに戻すことができました。思えばまちの学校を守ろうと思い立って３年がたっていました。

残念なことに屋代警察署は取り戻すことはできましたが、我々の町の屋代南高校は失いました。

市民の皆さんには「なぜ、南高が無くなったのか」「今後どのようになるのか」知る権利があり、また関係者は説明する義務があると考えましたので、記録に残すことにしました。

今後は県教委が委任した人たちによって懇話会で話し合いが行われ、校地が決まりますが、我々市民も積極的に関心を持ち、その動向を注視していきましょう。この小論が少しでもお役になれば幸いです。